けて、『最と此方へ寄らないか。さあ由美子も……』
『はい』と欣一は答へたが、尙も進みかねて居る。
『何故其那所に遠慮して居るのだ。俺はお前の處へ電報を打たうか、使を遣らうかと思つて居た所だよ』
『お父さん、私が差上げた手紙を御覽下すつたですか』
『見た〳〵、俺は彼の手紙を見て何の位胸を痛めたか知れん。何故お前は俺を棄てゝ田舍へ歸るのだ。いや、事情は聞く迄もない、今此の悅子の自白で何も彼も分つた。決して心配する事はない、お前は何處迄も俺の子だ、什麼事情があらうと、俺の傍を離れないで呉れ』と、鐐三は親子の情を込めた眼で凝と彼れを見詰めた。
『お父さん、濟みません』と欣一は顫へる聲で云ひながら傍近く寄つて『何卒赦して下さい、僕は今日お詫に來たのです』

『詫とは、何の詫か』
『僕は什麼しても田舍に歸らなければ成らんのです。お父さんにお別れするのは悲しいのですが、其れが島崎家の爲めですから』
『何を云ふのだ、お前が田舍に歸るのが何故島崎家の爲めだ。お前は俺の只一人の子ではないか、島崎家の總領ではないか、島崎家の跡を續ぐ者はお前より外には無い』
爾云はれて、欣一は驚いた樣に父を見たが、急いで遮る樣に、
『何うか其れを被仰らずに下さい、譬へ僕はお父さんの血を頂いた子でも、島崎家とは何の關係もないのです。僕は……僕は……』と云ひかけたが、彼れは恥づる樣に俯垂れて口を噤んだ。
『正當の母の子でないと云ふのか、爾だらう。然し其那事を決して憚る必要は無いのだ。俺は今日まで由美子を本當の娘だと思つて居たが、其れは間違

だと云ふ事が、今始めて悅子の自白で分つた。爾すれば、お前の外に俺の子はない、島崎家の跡を繼ぐべき者はお前の外にないのだ。なあ欣一、分つたか』と、鐐三は手を差し伸べて欣一の手を堅く握り緊めた。そして、夫人の方に振り向いて、

『悅子』と呼んだ。

『はい』と、悅子は靑白めた顏を擡げた。

『お前も聞いて居る通りだ、今日からは此の欣一を島崎家の跡目に直すからお前も承知をして呉れ。此の欣一はお前の子でないにしろ、島崎家の總領ならば、究りはお前の子も同樣だ、爾思つて世話をしてやつて呉れ』

『いゝえ、私は罪人でございます、何卒此まゝ離緣をなすつて下さい』と、悅子は我身を責めて術なげに云つた。

『お前が其れ程に悔悟して居る者を、俺は咎めん。成程お房を殘酷に逐出した事や、他人の子を我が子と僞つて、長い間俺を欺いて居た事は實に恐ろしい罪惡だ、女の身として有るべき所業ではない。然し、よく〳〵察して見れば お前の心にも憫むべき處がある、自身に子の無い爲めに賴りなく思ふ餘り淺ましく心が亂れたのだ。俺がお前の外に、お房と云ふ者を愛したのも誤りであつた、今お前が潔く懺悔をした以上、俺は深くお前の罪を責めようとは思はん。何事も過去の事は一切葬つて、皆が淸らかな心に返つて互に和合して呉れ、明日にも俺が居なくなつた後はお前と欣一が島崎家を護つて呉れなければならん』と、鐐三は沁々と諭した。

『それでは、恁那恐ろしい私の罪をお赦し下さるのでございますか』

『最う何も云ふな。俺は赦した』

『あゝ勿體ない、嬉しうございます』と悅子は感謝の涙をはら〳〵と膝に降らした。

『欣一さん、何卒勘忍して下さいよ、私が悪かつたのですからねえ』
『僕　僕は然し、何と云つて可いのか分りません』と、欣一は顔を垂れて心苦しさうに云つた。
『欣一、俺が今云つた事はお前にも分つたであらう』と、鐐三が傍から云つた。『悅子はお前の母だ、本當の母だと思つて呉れ』
『然しお父さん』と、欣一は眞直に父を見て、『僕は決心したのです、何うか田舍に歸らせて下さい。僕は島崎家を繼ぐ樣な身ではありません、一生立川の百姓になつて、鋤鍬を握つて暮らさうと思ひます。立川は僕にとつて懷しい土地です、お母さんの墓もあります。ねえお父さん、始めから僕といふ者が貴方のお目に掛らなかつたものと思つて下さい』
『それでは、お前は此の俺を棄てゝ行くのか』
『何うか許して下さい、僕はお父さんには不孝な子かも知れません』

鐐三は溜息をした。そして暫時彼れの顔を見詰めたが眼を連瞬いて、『欣一お前の心持は能く察して居る、然し今も云ふ通り、お前は自分の生れた素性を決して恥づるには及ばん。俺にとつては勿論、島崎家にも大切な只一人の相續人だ、悅子も是迄の罪を悔悟して、彼の通りお前に詫びたではないか。お前が田舍へ去つて了つて、島崎の家は什麼するのだ。俺は明日にも知れん病人だ、此の淋しい俺を殘して、お前は強つて立川へ歸らうと云ふのか』と、鐐三の聲は悲しげに顫へた。
欣一は思はず眼に涙含んだ。然し父の言葉に何とも答へかねて俯向いて居る。
『欣さん』と、此時猪之吉が悚へかねた樣に傍に進んで來た。『お前さん何故其那に澁くつて居なさるんだ。お父さんが彼れ程まで事を分けて被仰るんぢやねえか。立川の百姓になつて何が面白かんべい、島崎さんの跡取になりや

此位え幸福な事があるもんぢやねえ、えゝ、おい欣さん、其位えの事がお前さんに分らねえんですか』

『然し　猪之さん、僕は爾いふ意りで此處へ來たのではない』

『意りなんか什麼だつて構はねえ。お父さんや此の奥さんの懇ろな言葉が、お前さんの耳に入らねえのか。それぢや第一、親孝行の道が立たねえよ』と、猪之吉は躍氣になつて云つたが、急に氣が着いて、

『いや旦那さん、御免なせい、未だ御挨拶もしねえでつい〳〵ら〳〵と喋りました。俺ら欣さんと子供の時からの仲好しで、猪之吉と云ふ者でごぜえます』

『あゝ爾か、欣一の友達ですか。欣一が種々世話になつたでせう、私から禮を云ひます』と、鐐三は猪之吉の朴直らしい容貌や言葉付を快よげに微笑しながら云つた。

『其那事を被仰つちや勿體ねえ事です、俺ら此通り賤しい人間ですが、欣さんは學問もありや畫も上手だ。是非とも東京で出世して貰ひてえと、其ればかりが俺ら望みでござえます。處が、不意に田舍に歸つて、百姓になるなんて云ふから、俺ら迎ひに行つて無理に引戻して來たんですが、今も旦那のお話を聞けば、是程欣さんの爲めに幸福な事はありません』

『深切に能く心配して下さつた、尙お前さんからも欣一を諭して貰ひたい』

『へえ俺ら什麼したつて引留ずには措きませんよ』と、猪之吉は熱心に云つて、『それに就て、俺らお願ひですが、何うか欣さんのお母さんの墓を、東京の方へ祠る樣になすつてお呉んなせい』

『其れは云ふ迄もない、お房の遺骨は改めて島崎家の墓地へ葬る事としよう』

『それから、未だ一つお願ひがござえます』

『什麼いふ事かね』

『他でもねえ、由美子さんの事です。欣さんと由美子さんは堅く約束をした間でござえます。譬へ由美子さんが山村の娘さんで、欣さんは島崎家の跡取にならうとも、二人の約束に替りは無えんですから、何うか二人を一緒になすつてお呉んなせい』

『成程、其の事も私は考へて居た。由美子が悅子の實子でないのは却て僥倖であつた。私は由美子を愛してこそ居れ、今でも決して隔てはしない。殊に欣一の望ならば、由美子は改めて島崎家へ貰ひ受ける事にしよう、ねえ悅子お前にも無論否やはあるまい』

『はい、貴方のお情で爾して頂けば、由美子も什麼にか幸福でございませう』

と、夫人は悅ばしく答へた。

『由美子、此處へ來なさい』と、鐐三は呼んだ。

先刻から由美子は、一人室の隅に悄んぼりと立つた儘、袂を顏に當てゝ靜かに泣いて居た。鐐三は憫れむ樣に彼女を見ながら、

『お前は泣いて居るのか。何も悲しむ事はない、さあ此處へ來て平生の快活な顏を見せて呉れ』

『由美さん、お父樣の傍へお出でなさい』と、夫人も和しく呼んだ。

由美子は漸く涙を收めて、眼元を拭ひながら悄々と寢臺の傍に寄つた。

『由美さん』と、悅子は傷はしげに彼女を見やつて、『私はお前にもお詫をしなければなりません。何にも知らないお前に、今の悲しい思ひをさせるのも皆な私の罪です、何卒勘忍してお呉れ』

『いゝえ、私深い譯も知らないで、お父樣やお母さんに今迄種々我儘を申して、勿體なうございますわ』と、由美子は又もほろ〳〵と涙を零して、顏を掩つて歔欷あげる。

『これ、最う止しなさい、悅子も由美子も其那事を他人がましく云ふことはない』と、鐐三は制めた。『なあ由美子、お前は矢張り島崎家の娘だ、是迄と變りはない、俺は欣一とお前に島崎の家を繼がせれば實に滿足だ。お前達二人が幸福に結婚するのを見て死ねば、恁那悅ばしいことはないよ』

『お父さん』と、欣一は感激の色を顏に溢らして云つた。『それでは、僕と由美子さんの結婚を許して下さるのですか』

『あゝ芽出度い』と鐐三は兩手を伸ばして二人の手を引き寄せ、『何うか永く幸福に暮らして呉れ。由美子、お前は嬉しいだらう』

由美子はぱつと顏を染めて、涙に濡れた眼で羞かしさうに莞爾した。

『欣一、お前も滿足だらう』

『はい』と、欣一も顏を赭くした。

『あゝ芽出度い』と、鐐三は再び云つて、病み窶れた其顏にさも滿足らしい

微笑を湛へた。悅子夫人も猪之吉も悅ばしく其の狀を眺めた。

此時、廊下にどか〳〵と人の足音がして、

『いや、構はないで下さい、お目に掛れば分ります。何うか通して下さい』

と、看護婦と爭つて居る樣な聲が聞えた。

と思ふと、不意に扉が開いて其處に入つて來たのは、山村直衞とお歌である。直衞は未だ病中の體を無理に出て來たのか、お歌に手を牽かれてよろよろと室に入ると、突如寢臺の前に進んで突伏す樣に兩手を支いた。

『島崎さん、唐突に伺ひまして御無禮の所は御免なすつて下さい。手前は山村直衞です、貴方にお目に掛るのは始めてゞすが此の由美子の父です』

此の意外な人の意外な振舞に、鐐三を始め、人々は驚いて彼れを眺めた。

『手前はのめ〳〵と貴方にお目に掛る顏はございません』と、直衞は喘ぐ樣に顫へる聲で續ける。『そこを押して參つたのです。實は此の由美子が、今日

まで厚い御恩に預りました。有るべき事か、奥様のお腹から生れた娘と偽つて、貴方をお欺し申したのは、決して其處に被居る奥様の罪ではございません。皆な手前の爲業です。灰谷と腹を合せて、慾に眼の晦んだ此の悪人が謀つた事でございます。今姉娘の歌から、由美子と姉妹の名乗合ひをしたと聞いて、あゝそれぢや、若しや奥様に御迷惑が掛つちやならんと吃驚して、恁那取亂した姿で駈付けました。何うか奥様をお咎めなさらずに、此の爺に何の様な罰でも負はして下さい。なあ島崎さん、お願です、譬へ手前は踏み殺されても厭ひません』と、直衛はぼろ〳〵と涙を落しながら、床の上に頭を擦り付けて詫び入つた。

『分つた、山村さん、最う何も云ひなさるに及ばん』と、鎌三は平和な微笑を浮べて云つた。『凡ての事は此處で最う圓滿に解決しました。妻の悦子も深く悔悟した以上、私は罪を咎めん、そして由美子は改めて島崎家に貰ひ受けて、此の欣一、私の總領の欣一と結婚させる事にしたから、貴方も承知して下さい』

『え、それぢや何も彼もお赦し下すつて……』

『爾です、由美子は矢張り私の娘だ、島崎家の嫁です』

餘りの意外に、直衛は我が耳を疑ふかの如く、首を擡げて鎌三の顔をまじまじと眺めたが、其儘再びぴつたりと頭を伏せて、

『あゝ、最う何にも申しません。有難い事です、有難い事です』と、爺は言葉も塞がつて、悔悟の涙の替りに感謝の涙を痩せた頰に降らした。

其時まで、極り悪さうに背後に附添つてゐたお歌は窃と傍に寄つて、

『さあお父さん、お詫が濟んだら、皆さんのお邪魔ですから最うお暇なさいな』

『待つて呉れ』と、直衛は霎時してから涙を拭つて、ほつと太息をした。そ

して、思ひ着いた樣に傍に居る猪之吉に向つて、
『猪之吉さん、私はお前さんにも厚くお禮を云ひます。それに就て、恁ういふ所で云ひ出すのは失禮かも知れませんが、先刻お歌から種々お前さんの心持も聞きました』
『あらお父さん』と、お歌は慌てゝ遮つて、『其那こと此處で云ひ出しては可けませんわ』
『いや、まあ俺に任して呉れ　なあ猪之吉さん、此のお歌の樣な者をお前さんが心に掛けて下さつたのは、私は嬉しい。何うか今日から此娘をお前さんの女房さんにしてやつて下さい』
『え……』と、猪之吉は意外な顏をして、『ちや、歌さんは俺らの女房さんになつて呉れますかい』
『お歌は悅んで居ますよ、改めて私からお賴みします』

『あゝ、其れは結構な事だ。猪之さん、是非歌さんと結婚をしてお呉れ、爾なれば僕も嬉しい』と、欣一が傍から云ふ。
『私が媒介をしよう。』と、鐐三は云つた。『今欣一と由美子を握手させた此の手で、猪之吉さんとお歌さんの握手をさせよう』
鐐三は再び兩手を差し伸べて、猪之吉とお歌の手を取つて、堅く握り合さした。そして、喜悅に輝く顏に莞爾と微笑を浮べて、
『あゝ、是で皆が幸福だ、何も彼も滿足だ。』
人々は晴やかな笑顏を見合した。

春の流　後篇　終

大正八年一月二十日印刷
大正八年一月二十五日發行

定價金貳圓

著作者　佐藤紅綠

發行者　東京市本郷區駒込坂下町四十八番地　野間清治

印刷者　東京市芝區愛宕町三丁目二番地　笠間音次

印刷所　東京市芝區愛宕町三丁目二番地　東洋印刷株式會社

不許複製

春の流奥付

發行所　東京市本郷區駒込坂下町四十八番地　講談社

振替口座東京六六二九番

武田仰天子先生著

天晴才次

四六判三百二十頁
裝幀極美箱入

定價金壹圓貳拾錢
郵税金八錢

最新刊

本書は著者近來の會心の作なり、其内容の波瀾曲折に富み、興味多きこと恐らく古今絶無と稱すべく、中にも才次が身を賤奴に扮して大江戸に跋扈せる剛强の賊無頼の徒を片端より打ち懲らし、數多の俠客を悉く其配下に懐けし天晴れなる手練と、名高き掏摸の美人と豪家の愛娘に深く戀ひ慕はれて煩悶する戀のいささつは或は痛快に或は艶麗に、讀み終つて思はず快哉を叫ばしむる名篇也本篇が嘗て講談倶樂部に連載せられて、數十萬の讀者を熱狂せしめたりしは故なきに非ず。俠客傳として獨特の價値あると共に新講談として亦近來稀に見る名作たるを失はず。敢て之れを天下に推薦す。

發行所 東京本郷 講談社 振替東京六六二九九

最新刊

千鳥ケ淵

渡邊霞亭先生著

四六版四百八十頁
洋裝製本極瀟洒箱入

眞の戀を味はんとするものは讀め、骨肉の愛を味はんとするものは讀め、曩に講談倶樂部に掲げて五十萬の讀者に熱狂的歡迎を受けたる人情的家庭小説は是れ也。此の編平生の著者の筆とは趣をかへて、眞の戀、眞の愛を語る處に血あり涙あり、多恨多情の人は必ず一讀さるべからざる名著也。

口繪 池田輝方先生
裝幀 小村雪岱先生

定價金壹圓三十錢 送料八錢

(講談社發行圖書)

大日本雄辯會發行圖書

北畠吉先生著

■光は東方より

四六判總クロース定價貳圓　郵稅八錢

早大の教職を擲ち、蹶然起つて巷に獅子吼してより著者は忽にして、評論界第一人者を以て目せらる。聞け！この透徹の見と熾烈の論を。

松本苦味先生譯（忽三版）

■トルストイ　一日一割

三六判美裝　定價七拾五錢　送料八錢

杜翁の大思想を知らんと欲する者大人格に接せんと欲するものは須らく本書を讀まるべし。杜翁の諸著書中傑出せるものを擧げたり。

大日本雄辯會編（六版）

■卓上演說（テーブルスピーチ）

三六判携帶至便定價金八拾錢　郵稅六錢

宴會、婚禮、葬禮、其他あらゆる會合に於ける挨拶答辯を古今名家の範例付にて說明講述せるもの、何人も必讀すべき良書。

池田林儀先生著

■德富健次郎

四六判總クロース定價壹圓二拾錢郵稅八錢

文豪蘆花氏の思想！信仰！生活！そは何人も知らんと欲する所なるべし。本書は最も嚴正に忠實に氏を批判し、紹介したる書、近來の好著也。

東京本郷駒込坂下　大日本雄辯會　振替東京三九三〇

中村孝也先生著

■源九郎義經（四版發行）

菊判美裝　定價金壹圓五拾錢　郵稅十二錢

汪然として止め難き感興を麗筆の走るまゝに源九郎義經一代の盛衰興亡を敍し、最後に平泉の一夕に筆を擱けるもの、全篇を通じて詩興溢れ靈感漲る。而も著者は特に史學を專攻せるを以て其史實に確固たる根據あり。美文として將た史傳として誠に得難き快著也。

中村孝也先生著

■おら菊

定價金四十錢　郵稅六錢

美文、韻文收むるところ二十餘篇、全篇悉く金玉の響あり。折にふれ低誦し、高吟し行かば、湧然として詩興の禁じ難きものあるべし。

東京本郷　大日本雄辯會發行所　振替東京三九三〇

大日本雄辯會發行圖書

■**靜御前**（再版）

番衆浪人先生著

定價壹圓參拾錢（郵稅八錢）

武田仰天子先生著（三版）

歷史小說壇に其人ありと知られたる故著者最後の大傑作にして靜御前と義經との戀を描いて優艶、平家沒落の前後の詩的時代を背景として悲壯を極む。

■**明智光秀**

定價七拾錢（郵稅八錢）

笹川臨風先生著

武田仰天子先生一代の大傑作と稱へらるゝもの、光秀の幼時より其の悲慘なる最後に至るまで、悲壯痛絶戰國時代の悲壯曲として興味津々たり。

■**八幡船**

定價金五拾錢（郵稅八錢）

蚯蚓子先生著

嘗て天下青年の血を湧かしめたる八幡船以下、三緣山、英一蝶、孝女りや天狗の寄合等すべて十篇を收む。何れも著者會心の作敢て天下青年子女に薦む。

■**おけらの半生**

定價金壹圓貳拾錢（郵稅八錢）

先生は現代に傑出せる思想家にして文章家なり。暫く名を預り、おけらに託して吾が奇しき半生を敍す。而も其中に滑稽あり、諷刺あり、警句あり、諧謔あり。何人も一讀すべき好著なり。

東京本郷　大日本雄辯會　振替東京三三〇九

■**伊藤痴遊先生著**（三版）

作田文輔

▼四六判美裝　▼定價金壹圓五拾錢
▼千六百四十頁　▼郵稅金拾貳錢

之れ著者會心の作なり、玄輔は俠血義骨の壯士として明治政治史上に特筆すべき快漢なり彼の眼中名なく金なく唯縱横の奇才と燃ゆる如き義氣とを抱きて明治政界に游泳せり、義傑傳として面白く又明治政界の裏面を知るに好個の書なり。

■**碧瑠璃園先生著**

赤垣源藏

▼菊版總クロース　▼定價金壹圓貳錢
▼四百二十餘頁　▼郵稅金拾

赤垣源藏は赤穗義士傳の花形として世人之れを嘆稱して惜かず、歷史小說壇に其の人あり、知られたる先生は此の美しき史材を扱ふに優麗なる筆を以てし遂に此の書を大成す。見よ彼の悲愴なる德利の分れや最後を彩る彼の美しき眞情を。

東京本郷駒込坂下　講談社發行　振替東京六六二九番

◆評判の月刊雜誌◆

情趣
興味

講談倶樂部

■毎月一日發行
■定價金四十錢
■郵税一錢

◆清新な續物……新講談、落語、新小説、脚本、笑話、浪花節、情話、演藝、活動寫眞、浮世譚等面白い物滿載

◆口繪と寫眞……當代一流畫家の麗筆になれる十數度刷の石版を初め、天下の美人風俗の寫眞口繪綺麗な物澤山

◆溢るゝ情趣……全冊を通じ、新鮮にして又美妙なる情趣滾々と湧きて盡きず、老若男女誰にも適する興味雜誌

趣味
實益

面白倶樂部

■毎月一日發行
■定價金廿五錢
■郵税一錢五厘

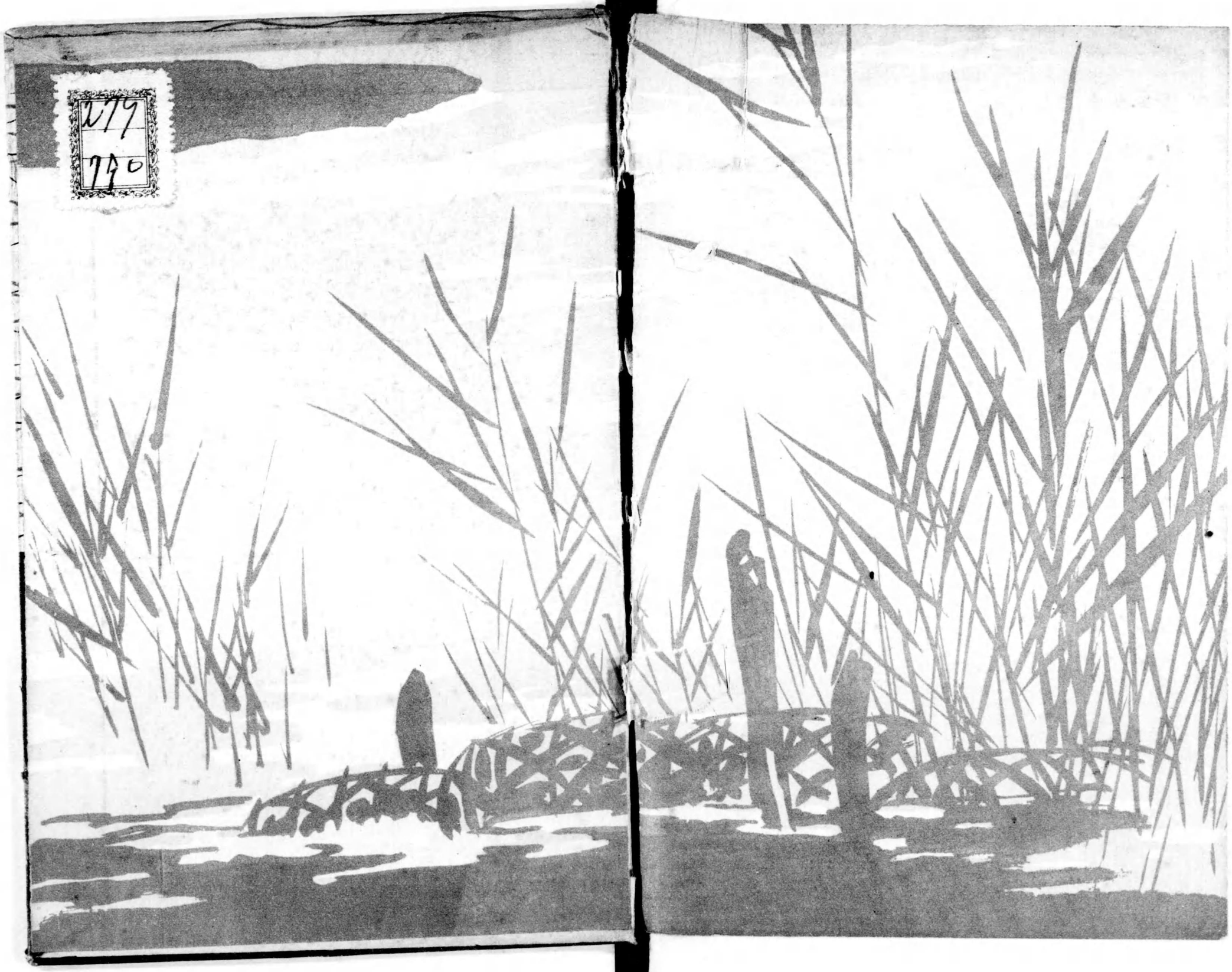
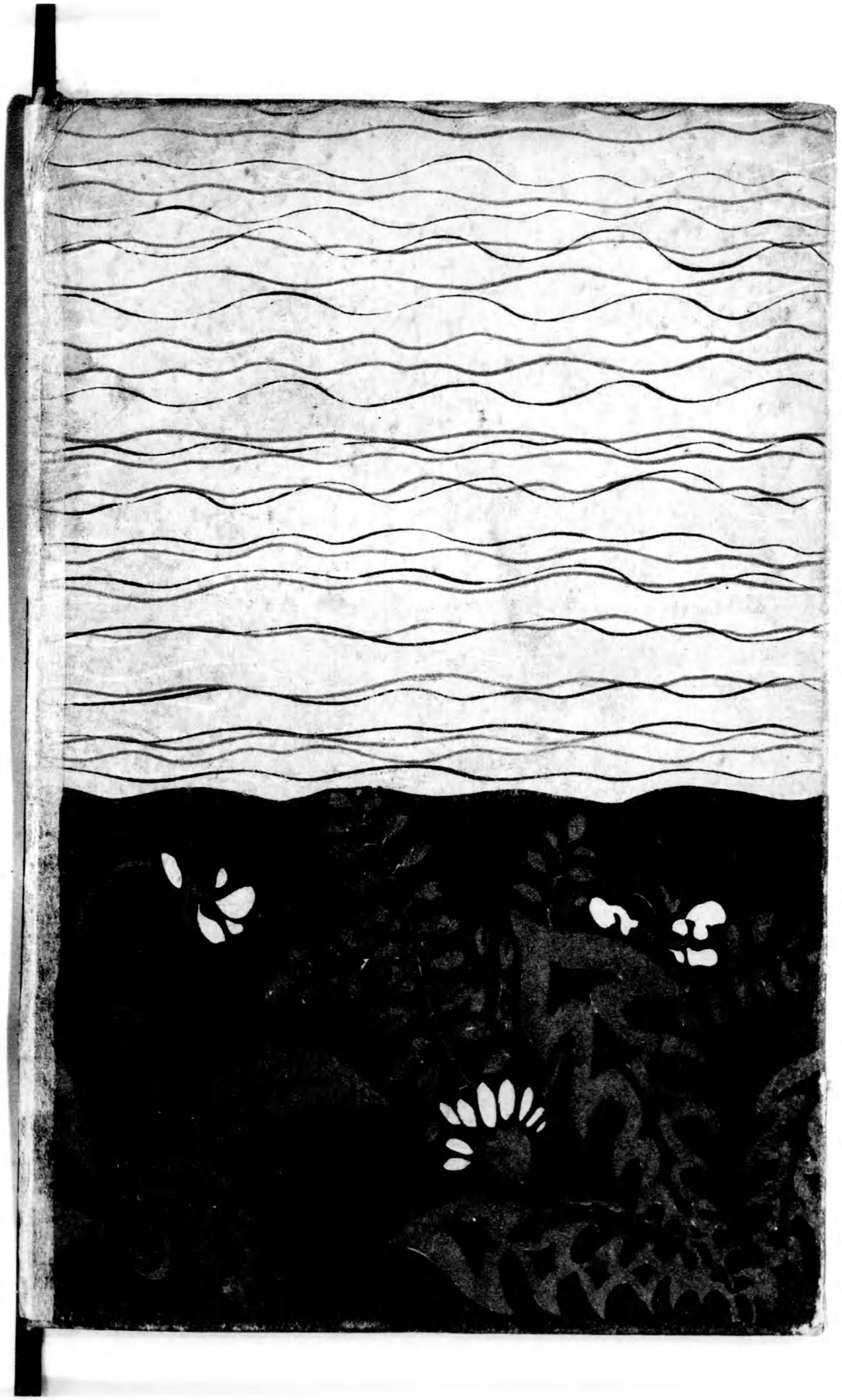
◆面白い讀物……新小説、新講談、落語、演藝、情話、史傳、漫畫、ポンチ、探偵物等一讀すれば書を措く能はず

◆有益な記事……家政、料理、衞生、園藝、逸話、學生欄、少年欄、懸賞讀者文藝等面白く且つ有益な讀物

◆艶麗な口繪……恍惚なる口繪、壯麗なる美人風俗時事寫眞、實に趣味と實益を兼ねたる天下無類の快雜誌なり

◆東京本郷駒込◆ 講談社發行 ◆振替東京二六六九◆

279
770



終